

簿記・会計

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和6年度共通テスト追・再試験が実施された。

共通テスト追・再試験の「簿記・会計」は、本試験と同様の出題範囲となっている。また、共通テスト追・再試験の受験者数、得点状況等については非公表であるが、受験者の高等学校段階における基礎的な学習の達成度を判定するという役割は本試験と変わらず、これまでのセンター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が重視される。また、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定も重視される。

以上のことから、「簿記・会計」の内容・範囲、難易度や分量、表現及び形式、また、センター試験及び共通テストにおけるこれまでの要望や意見への対応等を踏まえ、次のような観点から分析・検討を行う。

- (1) 問題作成方針を踏まえて、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスの取れた出題となっている（出題のねらい）
- (2) 学習指導要領の範囲内から出題されており、特定の分野・領域に極端に偏っていない（出題範囲）
- (3) 問題で使用される資料等が、特定の教科書に偏っていない（題材）
- (4) 高等学校における学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、その場面設定が、教科・科目の本質に照らし必然性のある形で出題されている（問題の場面設定）
- (5) 試験問題の構成（設問数、配点、設問形式等）は適切である（問題構成）
- (6) 文章表現・用語は適切である（表現・用語）
- (7) 問題の難易度は適正である（難易度）
- (8) 得点のちらばりは適正である（得点のちらばり）

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 試験問題の範囲・構成等

今回の出題内容は、全ての問題において学習指導要領の範囲内であり、特定の教科書や分野に偏ってはならず、学習指導要領の目標に沿って、簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることができる問題となっている。令和6年度の「簿記・会計」追・再試験の内容と配点、学習指導要領との関連を整理すれば、＜資料＞のとおりである。

<資料>追・再試験の出題内容等一覧

第1問（配点 40）

設問(配点)	出 題 内 容	学習指導要領との関連
A (22) 問 1(8) 問 2(6) 問 3(2) 問 4(4) 問 5(2)	○個人企業の先輩と後輩の会話文形式の問題 ・伝票の種類 ・伝票（3 伝票制・5 伝票制）の起票と集計 ・取引要素の結合関係	簿記（1）簿記の基礎 エ 簿記一巡の手続 (5) 会計帳簿と帳簿組織 イ 伝票
B (18) 問 1(8) 問 2(8) 問 3(2)	○株式会社の取引に関する仕訳と転記について の問題 ・社債の発行 ・社債の買入償還 ・社債利息の支払い ・法人税等の確定申告 ・繰越利益剰余金の配当・処分 ・当期純損失の計上 ・新株式の発行	財務会計 I (1) 財務会計の基礎

第2問（配点 30）

問 1(18) 問 2(2) 問 3(6) 問 4(2) 問 5(2)	○複合仕訳帳制度を採用する株式会社の記録から、取引及び商品有高帳・当座預金出納帳・売上帳・総勘定元帳・買掛金元帳の空欄（勘定科目・金額・数量・元帳番号）を答える問題 ○売上総利益を答える問題	簿記(5) 会計帳簿と帳簿組織 ア 会計帳簿 ウ 仕訳帳の分割
---	--	---------------------------------------

第3問（配点 30）

問 1(16) 問 2(4) 問 3(2) 問 4(2) 問 5(4) 問 6(2)	○特設店（本店の会計から独立していない）を設けている個人企業の残高試算表・修正事項・決算整理事項等から損益勘定及び繰越試算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題 ○支店を開設し、本店から会計を独立させた場合の会計処理に関する問題 ・取引の仕訳 ・現金勘定・本店勘定残高 ・支店独立会計制度の特徴	簿記(3) 決算 ア 決算整理 イ 財務諸表の作成 (4) 本支店会計 ア 本店・支店間の取引 イ 財務諸表の合併
---	---	--

3 試験問題の内容・分量・程度・表現等

全体的な難易度は、本試験と比較して高いように思われる。計算や資料の読み取りに時間がかかる問題が複数見受けられたため、解答に時間を要したのではないだろうか。第1問の設問Aは、伝票及び取引要素の結合関係についての問題で、いずれの問題も基礎的・基本的な内容である。また、設問Bは、株式会社の取引に関する仕訳と転記についての問題で、幅広い内容となっているが、いずれの問題も難易度はさほど高くない。第2問は、複合仕訳帳制度に関する問題で、各種帳簿（商

品有高帳・当座預金出納帳・売上帳・小口現金出納帳・総勘定元帳・売掛金元帳・買掛金元帳)の関連を問う問題であるため、思考力と判断力が必要となる。試験時間の多くをこの問題の解答に費やしたものと推察する。第3問は、特設店(本店の会計から独立していない)を設けている個人企業における決算と、その特設店を支店化し、会計を独立させた場合の会計処理に関する問題である。見慣れない問題形式で戸惑った受験者もいたと思われるが、内容は基本的なものであった。

全体を通して基礎・基本を問う問題と思考力・判断力等を問う問題がバランス良く出題されている。受験者には簿記・会計の仕組みの総合的理解が求められ、学習の到達度を測る問題として適切である。設問文や形式は明瞭簡潔で無駄や不足はなく、文章表現や漢字表記も難解にならないように配慮されている。ページ配置も総合的な資料の読み取りが必要な第2問・第3問共に見開き2ページずつの計4ページで読み取れるように収まっており、読み取りやすさを確保している。また、各資料に付されている「(注)」もフォントサイズが適当な大きさで、受験者が解きやすいよう配慮されている。更に配点についても全てが2点問題で統一されており、どの問題に正解したかによって有利・不利が生じないよう配慮されている。多くの点で、過去の出題に対する意見・要望が生かされているが、作業量が多く、試験時間が不足気味であったように感じられる。

第1問 Aは、個人企業の先輩と後輩の会話文形式の問題である。共通テストの特徴の一つである問題の場面設定が意識されており、その場面がイメージしやすく、会話の流れもスムーズであった。問1の「ア」は、1伝票制についての問題である。3伝票制や5伝票制にはなじみがあっても1伝票制については、初めて目にした受験者もいたのではないだろうか。「カ」は他店振り出しの小切手は現金として扱うことを問う基本的な問題であるが、当座預金と勘違いしやすい内容であり、注意が必要であった。問2は、取引要素の結合関係についての問題である。いずれの取引も基本的な内容であり難易度は高くない。問5は、仕訳集計表の貸借差額が、集計する期間の取引内容によっては、通常時の残高とは逆になってしまうことに関する問題である。このことは、簿記の学習過程において起こりやすい疑問であり、学習の過程を意識した適切な場面設定であった。

Bは、株式会社の取引に関する仕訳と転記についての問題である。社債の発行・買入償還・利息の支払い、法人税等の確定申告、繰越利益剰余金の配当・処分、当期純損失の計上、新株式の発行と内容は多岐に渡る。問1の「ナニ」は、繰越利益剰余金の配当に伴う利益準備金の積み立てに関する問題である。利益準備金は、会社法の規定により、剰余金の配当として会社が支出する額の10分の1を、資本準備金と合計して資本金の4分の1に達するまで計上しなければならない。本問において、配当金の10分の1は¥150であるが、資本準備金と利益準備金の合計額が資本金の4分の1に達するまでは、残り¥100で良いため、利益準備金の計上は¥100となる。問2の「ネ」は、当期純損失の計上に関する問題である。決算における重要な手続きの一つであり、しっかりと理解しておくべき内容である。問3の「ノ」は、新株式を発行した際の資本金及び資本準備金の計上に関する問題である。正しい転記を選択する問題であるが、問題文をしっかりと読み、落ち着いて解答すれば、解答は難しくなかったであろう。

設問全体をとおして、さほど難易度は高くない。しかし、Bの問題の全て(18点分)が、「財務会計Ⅰ」からの出題であるため、共通テストの問題としては、その割合が多いと感じた。

第2問 複合仕訳帳制度を採用する株式会社の記録から、取引及び商品有高帳・当座預金出納帳・売上帳・総勘定元帳・買掛金元帳の空欄(勘定科目・金額・数量・元帳番号)を答える問題である。「資料1」から「資料6」までの資料全体を見渡し、各種帳簿間の関連を正しく読み取り、答えを導き出す思考力が要求された。問1の「工」は、15日終了時点での残高数量と残高金額を求めた上で単価の計算をするが、残高数量の計算には、1日の残高に4日・14日・15日の取引数

量を考慮する必要がある、手間がかかる。それに加え、15日の取引は売上ではなく、仕入返品であるため、残高欄の金額の計算にも注意が必要である。思考力・判断力が求められる良問であるが、一つの問題の作業量としては多いと感じる。また、**オカ**は、売上帳16日の取引数量を商品有高帳とのつながりから割り出し、その売上金額を計算する。摘要欄が小切手であることから当座預金出納帳の同日の金額も¥180となる。この問題は、手間がかかる上、帳簿間のつながりをしっかりと理解していないと解答は難しかったであろう。**ツテ**は、売上帳の値引き額が¥10であることから解答を求めるが、問3の**タ**が解答できていない受験者には、解答することは難しい。**タ**は特殊仕訳帳の仕組みについて、理解が不十分な受験者にとっては、間違えやすい内容であるため、累積での誤答となってしまう可能性が高い。問2の**キ**は、小口現金出納帳の30日の受け入れが小切手¥10であることから判断するが、小口現金出納帳と当座預金出納帳を組み合わせた問題は、目にする機会が少ないため、戸惑った受験者が多かったのではないだろうか。問4の**チ**は、小口現金での支払いの取引であるため、仕訳が想像できれば解答は可能であるが、思考力が求められる問題であった。問5の**ネノハ**は、純売上高¥770から売上原価¥535を差し引いて求めるが、売上原価の計算には、商品有高帳の払出欄を活用することに気付く必要がある。それに加え、払出欄の合計額には、仕入返品高と次月繰越分が含まれていることにも気付かなければならないため、難易度が高かったのではないだろうか。問2・問4・問5いずれも理解の質が問われる良問であった。

設問全体としては、思考力を要するものが多く、作業量也多めであった。解答に時間を要する問題も複数見受けられ、苦戦した受験者が多かったのではないだろうか。

第3問 本店の会計から独立していない特設店を設けている個人企業の残高試算表・修正事項・決算整理事項等から損益勘定及び繰越試算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題を皮切りに、その特設店を支店として開設し、本店から会計を独立させた場合の会計処理に関する問題へとつながる。損益勘定・残高試算表の作成及び本支店の会計処理について、いずれも基本的な内容が多く、難易度は高くない。問1の**チツテ**は、繰越試算表の資本金であるが、損益勘定の借方の一番下が当期純利益額であることに気付いた上で、引出金を整理して解答を求める必要がある。損益勘定及び繰越試算表の特徴が理解できていることに加え、引出金についての理解も必要なため、受験者の思考力が問われる良問であった。問3の**ト**は、収入印紙が印紙税であることへの理解が試された。問5の**ノハヒ**は、**資料6**を順番どおりに処理していけば、解答を求めることができる。しかし、支店を開設した際の支店の仕訳について、貸方が本店勘定になることが理解できていなければ正答にはつながらない。問6は支店会計の独立について、その特徴を理解していなければ解答することは難しい。問5・問6共に本支店会計をしっかりと理解していないと解答できない問題であり、知識の理解の質が問われる良問であった。

設問全体として基礎的・基本的な問題と思考力・判断力を問う問題がバランス良く出題された良問であると感じた。しかし、問6の内部利益の控除については、「財務会計Ⅰ」の内容であり、第1問のBと合わせると「財務会計Ⅰ」からの出題が20点分となる。共通テストの問題としては、その分量が多いと感じた。

4 ま と め（総括的な評価）

- (1) 「財務会計Ⅰ」からの出題が多めであったが、全体を通して受験者の学習達成度を適正に判定できる問題であった。今回の問題には、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解く問題がバランス良く含まれている。これは、高等学校において「簿記・会計」を理論的かつ偏りなく学ぶ必要性を示唆しており、高等学校における「簿記・会計」教

育の在り方へのメッセージが感じられた。今年度で共通テストでの「簿記・会計」は終了するが、簿記・会計が社会において重要な知識であることは変わらない。簿記・会計を学んでいる生徒にとって、学びの成果を進路実現に生かす機会が減ってしまうことは、残念に感じる。

- (2) 簿記・会計は高校入学後に初学することを踏まえ、学習指導要領の範囲内の出題、教科書で使用されている表現の使用等が考慮されていた。しかし、やや解答時間に不足が生じている傾向が見受けられた。